

日本人と韓国人の異文化コミュニケーション

曹, 美庚
京都学園大学・梅花女子大学：非常勤講師

<https://hdl.handle.net/2324/6358>

出版情報：人間環境学入門, pp.100-109, 2001-12-25. 中央経済社
バージョン：
権利関係：



言語という環境

第9章 日本人と韓国人の異文化コミュニケーション

異文化コミュニケーションの難しさは、文化の違いがそのままコミュニケーション・スタイルの違いとして現れるところにある。その点、日本と韓国は極めて同質的な文化であり、密度の高い異文化コミュニケーションが期待できる。ただし、両国間にもマイナーな文化の違いは存在しているため、お互いにその違いを認識し、認め合うことから真の異文化コミュニケーションは可能となる。

1 ■ はじめに

コミュニケーションには、言語的コミュニケーションと非言語的コミュニケーションがあるといわれている。スムーズなコミュニケーションは、この2つのコミュニケーション手法の適切なミックスによって実現される。そして、コミュニケーションが国境を越えて行われる場合、それは異文化コミュニケーションとなる。異文化コミュニケーションの難しさは、文化の違いがそのままコミュニケーション・スタイルの違いとして現れるところにある。

「文化」といえば、よくアメリカ文化と日本文化が対比される。なかでも、「デジタル文化のアメリカ」と「アナログ文化の日本」とか、「低コンテクストのアメリカ」と「高コンテクストの日本」といった対比が代表的である。上の「コンテクスト (context)」とは、コミュニケーションを取り巻く状況や場のことを指している。対人コミュニケーションにおいて、信号（言語的信号と表情のような非言語的信号）の意味は「コンテクストに依存する」といわれる。

その意味で、異文化コミュニケーションとは、コンテクストを十分に共有しない人同士のコミュニケーションである、と定義できる。

例えば、「わが家にお食事にでもいらっしゃいませんか」と低コンテクスト文化のアメリカ人が言えば、それ以上でも以下でもない言語表現そのままを意味する。しかし、それを聞いた高コンテクストの日本人は「単純に受けているものか」「一応丁重にお断りしたほうがよいのか」と躊躇することになる。それを見たアメリカ人は「食事1回のことでの何を考えているのだろう」といぶかることになる。このように、高コンテクストの人は、コンテクストをいろいろに読んで気を回し、反対に低コンテクストの人は高コンテクストの人の言葉を単純に考えがちになる。それを見た高コンテクストの人は、相手に対し「何と気配りのない人なんだろう」と考えるのである（林 [1994, 68-72頁]）。

このように、日本人同士のコミュニケーションならば、高コンテクストのコミュニケーションで特に大きな問題は起こらないが、日本人とアメリカ人の間のコミュニケーションとなると、高コンテクストのコミュニケーションはあてにならない。日米の文化は非常に異質なため、低コンテクストのコミュニケーションにならざるを得ないのである。

もっとも、異文化間といえども、2つの文化の間に同質性が高い場合には、高コンテクストのコミュニケーションが有効な場合がある。一般に、アジア、中東、アフリカが高コンテクスト文化で、北米、中南米、ヨーロッパが低コンテクスト文化といわれる。なかでも韓国は、日本同様にかなりの高コンテクスト文化として知られている。

本章では、日本人と韓国人の異文化コミュニケーションを高コンテクスト文化同士のコミュニケーション問題として捉え、分析を加えることとする。特に、日本文化と韓国文化の同質性と異質性を考察することによって、日本人と韓国人の異文化コミュニケーションについて理解を深めることにしたい。

2 ■ 日韓文化の同質性

日本と韓国は地理的に近いだけでなく、文化的にも近いといわれている。これは普段のわれわれの生活レベルで容易に確認できる。例えば、アメリカに留学した経験のある人なら誰でも経験すると思うが、日本人留学生と一番仲良しになれるのは、実は韓国からの留学生であることが多い。アメリカは様々な国々からの留学生で賑わうが、なかでも日本人と韓国人の留学生が意気投合して和食を食べに行ったり、韓国料理を楽しんだりすることが多いというはどういうことなのだろうか。初めてアメリカの地を踏んだ韓国の留学生にとって、韓食以外で唯一違和感なく食べられるのは和食だそうだ。逆に、多くの日本人留学生が韓国料理の食材を好んで買うといわれている。このことは、日本と韓国の食文化が世界的に見れば、かなり同質的であることを物語っている。また、異國の地で日本人と韓国人の留学生が友達になりやすいというのも、かなりの程度思考体系や価値観の類似性に起因するものと思われる。

その1つの要因として、言語的類似性があげられる。日本語とハングルは文法的に非常に似ており、同時通訳のときなどにその類似性が実感できる。例えば図9-1のように、「私はパンを食べます」というとき、これを文法的に分

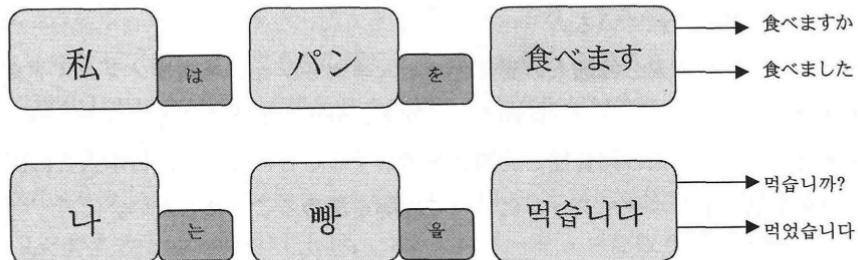


図9-1 日本語とハングルの比較

析すると、「主語（私）+助詞（は）+目的語（パン）+助詞（を）+動詞（食べます）」となるが、ハングルの場合も全く語順は同じである。また、両言語ともに助詞を多用している点も似ている。さらに、動詞の語尾を変形させて疑問形や過去形を作るのも実によく似通っている。

以上のような言語の文法的類似性が、日本人と韓国人の思考体系の類似性にまで結びついているように思われる。センテンスが終わるまで待たないと、それが疑問文なのか、否定文なのか、過去形なのかがわからない日本語や韓国語の体系は、中国語や英語のそれとは大きく異なっている。それに伴って、思考体系や思考経路も中国人やアメリカ人とは異なってくるはずである。

3 ■ 日韓文化の異質性

ところが、日本人と初めて接する韓国人、韓国人と初めて接する日本人は、お互いの異質性にも気づかされることが多い。skinshipに慣れている韓国人からすれば、握手さえろくに交わさない日本人が不思議に映るのである。また、建前と本音を使い分ける日本人からすれば、建前の文化を持たない韓国人がアグレッシブに映るだろう。あるいは、静態的な日本と動態的な韓国という見方もあり得る。

こうした日本文化と韓国文化の相違を説明するためのキーワードの一つに「ディスタンス (Distance)」という概念がある。日本語に訳せば「距離」だが、どうも日本と韓国の中には、距離に対する考え方方が異なっているように思われる。一言で「距離」といっても、ここでの距離は人と人の間の距離のことである。それは、物理的な距離の場合もあれば、心理的な距離の場合もある。以下、「ゼロ・ディスタンス (Zero Distance) 論」について詳しく見てみよう。

文化によって気楽に感じる人と人の間の距離は異なる。なるべく距離を置こうとしない文化もあれば、一定以上の距離を常に保ちたがる文化もある。日本文化は後者にあたる。その証拠に、日本人同士は、握手をすることはめったにない。授賞式においても賞状を渡してから握手を求める姿はまれである。仲の

いい友達に1ヶ月ぶりに会ってもなかなか手を差し出すことはない。飲み会からの帰りに同僚と握手をして分かれることもほとんどないだろう（ただ、外国人と出会ったときには握手をするけれど……）。

一方、韓国の場合は事情が異なる。機会があれば握手をする。授賞式でも、友人に出会ったときにも、同僚との分かれ際にも、あるいは、偶然意見が一致した場合や何らかの原因で盛り上がった場合にも、至るところに握手の文化が浸透している。握手によって自分が相手に対して好意を持っていることをお互いに確かめ合うのである。韓国人はスキンシップに慣れている。よく女子中学生や女子高生たちが二人で手をつないで歩いている姿を見かける。プライベートな話合いのときにも自ずと手が相手の肩や膝などに置かれたりする。

日本人が一定の距離を保とうとするのに対し、韓国人はディスタンス・ゼロを良しとする。少しでも距離が離れないとむしろ疎遠感を感じるのである。日本の場合はその逆で、距離が縮まりすぎるとお互いに不安になるようである。それ以上近づけない心理的、あるいは物理的距離を常に保持しているのである。

ただし、日本の場合も、だからといって相手との距離が遠のくのを好むわけではない。近すぎるのはいやだけど、遠すぎるのも我慢できないのだろう。そこで、一定の距離内に保つために本音とは別に建前という手段を用いることになる。その点、本音でぶつかっていく韓国とは大きな差がある。ぐっと近づけるか、思いっきり距離を置くかのいずれかを選ぶ韓国に比べ、日本は適度の距離を置き、近くも遠くもない曖昧な状況を作り上げる。そこに建前という手段が貢献するわけである。

韓国ではよく知人を家に招く。あるいは廊下でばったり出会った知り合いの隣りの奥さんを家に呼んでお喋りを楽しむこともよくある。決まり文句のように「どうぞお入りください」が迷いもなく自然に口からこぼれる。ここでも、日本は状況がやや異なっている。日本人は、なかなか知人を家に招くことをしないようだ。突然の来客があった場合には玄関先で対応する。近所のおばさんとも玄関先で何時間もお喋りをしたりする。そうすることによって適度の距離が保たれるのである。

このように、日本は相手と常に一定の距離を保つことで自らの心地良さを実現するのに対し、韓国は相手との距離をゼロにすることによって安定感を得ようとする。そこに日韓文化の大きな違いがある。いわゆるゼロ・ディスタンスが韓国人にとって最も心地良い状態なのである。

4 ■ 文化の国際比較

前節の「ゼロ・ディスタンス論」は、日本と韓国の文化的相違的一面を浮き彫りにしたものである。だが、文化的な差異があるとはいえ、グローバルな視点から見れば、日本と韓国の文化は非常に同質的なものとなっている。

世界50カ国を対象にしたホフステッド（G.Hofstede）の1985年の調査研究によれば、「権力格差」の次元（社会の構成員が、社会における人々の間の不平等な階位的な力関係を受け入れる程度を表す指標）と「不確実性回避」の次元（未知の状況、不測の事態などに対して持つ不安に対する耐性度を表す指標）において日本と韓国は非常に類似していることが示されている。

下記の図9-2に見るよう、両国ともに「権力格差」が大きく、「不確実

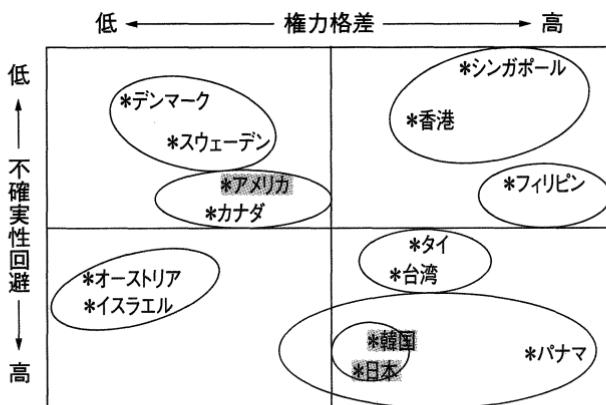


図9-2 2つの社会・文化次元と各国の分布(1)

出所：Hofstede(1985, p.351)より、一部削除修正。

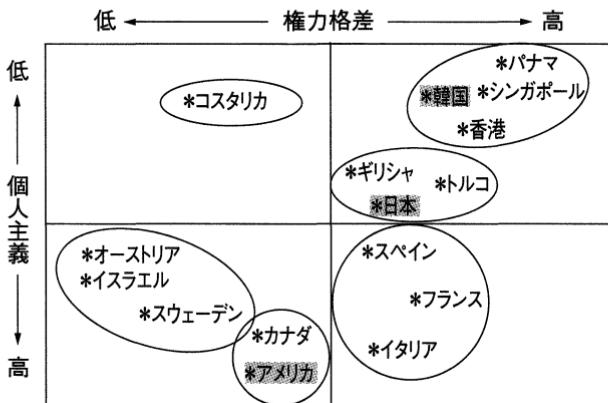


図9-3 2つの社会・文化次元と各国の分布(2)

出所：Hofstede(1983, p.82)より、一部削除修正。

性回避」の程度が高い。すなわち、日本と韓国では、社会における人々の間の不平等な階位的な力関係が社会の構成員によって受容される程度が高く、未知の状況や不測の事態を回避しようとする傾向が強いことがうかがえる。

同研究では、「権力格差」や「不確実性回避」以外にも、「個人主義」と「男性的傾向」の次元をも調査対象に含めており、例えば、「個人主義」と「権力格差」の次元では、図9-3のような結果を示している。

個人主義の次元に注目すると、韓国は個人主義の程度が低い集団主義的文化になっており、一方の日本も、やや個人主義スコアが高いものの、どちらかといえば集団主義的文化に近いといえよう。

以上の結果を踏まえると、世界的に見れば、日本と韓国は文化の同質性がかなり高い国同士であることがわかる。そのため、両国では日常的な生活の中にも共通した部分が多く見受けられる。例えば、日本ではよくお行儀の良い子供を良しとする風潮があるが、そのために親の厳しい躰が強調される。韓国の場合も、儒教の影響はまだ根強く残っており、目上の人を敬う心が重んじられる。躰のためといえども、自分の子供に鞭を加えられない欧米とは何かが異なる。

この地球上で、これほどまでに似通った文化や言葉を持つ2つの国が果たしてどのくらい存在するだろうか。

5 ■ 異文化コミュニケーションへの含意

日本と韓国は文化的に非常に似通っている反面、ゼロ・ディスタンス論が示唆するように、異質的な側面も数多く見受けられる。しかしながら、文化を国際的に比較してみると、日韓文化はその異質性にも増して同質性が大きくクローズアップされる。日本人以外で最も自分に近い、すなわち考え方が似ており、感情が似ており、生活習慣も似ているのは、韓国人かも知れない。同様に、韓国人以外で最も韓国人に近い考え方や感情や生活習慣を保持しているのは日本人であろう。もしそうだとすれば、日本人と韓国人の異文化コミュニケーションのあり方は、他の国のそれとはやや異なるものになる可能性がある。

冒頭で、コミュニケーションには、高コンテクストのコミュニケーションと低コンテクストのコミュニケーションがあると述べたが、異文化コミュニケーションは一般的には低コンテクストのコミュニケーションにならざるを得ない。しかしながら、日本と韓国のように、異文化コミュニケーションではあるものの、お互いの文化の同質性が極めて高い場合には、低コンテクストのコミュニケーションと高コンテクストのコミュニケーションをミックスすることができる。そのことは、他の国の人との間で行われる低コンテクストのコミュニケーションに比べ、かなり密度の高いコミュニケーションが日本人と韓国人との間では可能であることを示唆している。アメリカ留学中に日本人留学生と韓国人留学生が最も仲良くなれるという現象は、低コンテクストのコミュニケーションに高コンテクストのコミュニケーションが加わることによってコミュニケーション自体が密になった結果ではないだろうか。

もっとも、高コンテクストのコミュニケーションには落し穴もある。あまりにも高コンテクストのコミュニケーションに頼りすぎると、日本人と韓国人の間に存在する微妙なコンテクストの違いから誤解が生じる可能性がある。

確かに日韓文化の同質性は高いものの、ものの見方や価値観などが完全に一致するわけではない。前述のゼロ・ディスタンス論で述べたような違いは依然として存在するのである。低コンテクストのコミュニケーションを高コンテクストのコミュニケーションで補完することは望ましいことだが、その際にも、コンテクストの解釈に微妙なずれが生じる可能性が常に潜んでいることを踏まえておかなければならない。

6 ■ む す び

異文化コミュニケーションにおいては、国と国との間の文化の相違によって、日常的なコミュニケーションではあまり意識されることのない難しい問題が提起される。しかしながら、両国間の文化の同質性が高い日本と韓国の場合には、文化の異質性が高い他国に比べると、異文化コミュニケーションがずっとスムーズに行われる。だから、コミュニケーションに必要な最低限の語学力まで伴えば、ほぼ自國の人と同じような感覚でコミュニケーションを行うことができる。そのうち、いつの間にか外国人とコミュニケーションをとっているという意識がなくなり、自分と相手が同化されてしまう。

日本人と韓国人の異文化コミュニケーションの問題は、同化してしまったがゆえに、相手が自分とは異なる文化の持ち主であるという事実を忘れてしまい、そこからしばしば誤解や勘違いが生じてくることである。ゆえに、前述のゼロ・ディスタンスの概念は、とりわけ日本人と韓国人の異文化コミュニケーションの場面では必ず押さえておかなければならない概念だといえよう。お互いが相手の持つ文化の異質な部分を認めた上で、誠意を持ってコミュニケーションに臨めば、日本人と韓国人の間のコミュニケーションは密度の高いものとなり、そこから信頼感や友情も生まれてくるに違いない。

参考文献

○E.T.Hall, *Beyond Culture*, Anchor Books, 1976. (岩田慶治・谷泰訳『文化を超える』)

- て』TBSブリタニカ, 1979年)
- G.Hofstede, "The Cultural Relativity of Organizational Practices and Theories", *Journal of International Business Studies*, Fall 1983.
- G.Hofstede, "The Interaction between National and Organizational Value Systems[1]", *Journal of Management Studies*, 22: 4, July 1985.
- G.Hofstede, *Cultures and Organizations: Software of the mind*, McGraw-Hill International, 1991. (岩井紀子・岩井八郎訳『多文化世界：違いを学び共存への道を探る』有斐閣, 1995年)
- 林吉郎『異文化インターフェイス経営』日本経済新聞社, 1994年。

学習の手引き

- エドワード・T・ホール著, 岩田慶治・谷泰訳『文化を超えて』TBSブリタニカ, 1979年。
- アメリカの文化人類学者エドワード・T・ホールによって書かれた本。高コンテクスト文化, 低コンテクスト文化という概念と両文化の比較がなされている。
- 林吉郎『異文化インターフェイス経営』日本経済新聞社, 1994年。
- 文化を理解する視点の一つとして, アナログ文化とデジタル文化という概念を提案し, アナログ文化と高コンテクスト文化との類似性, デジタル文化と低コンテクスト文化との類似性について解説した本。経営学の観点から書かれている。

〔著 美庚〕